

新時代を迎えた日中関係

谷野作太郎

(財団法人 日中友好会館副会長)

一、はじめに

此度、日中平和友好条約締結三十周年、そして中国の改革開放政策三十周年を記念して開催される中国社会科学院日本研究所主催の本シンポジウムにお招きを受けて出席することが出来、大変うれしく思います。ご招待に対し心から感謝いたします。

冒頭、一昨日の有人宇宙飛行船「神州七号」発射成功に対して心から祝意を申し述べたいと思います。

さて皆様ご承知のように、日中両国の関係はひと頃よく「政冷経熱」と形容された状況をようやく抜け出て、本来あるべき正常な姿に戻りつつあります。私はこのことを大変喜んでいきます。と言うのも、お互いの間の相互依存関係が深まりゆく中、日中(中日)関係は、日本にとっても中国にとっても今や切っても切れない大切な関係であり、更には安心した良好な日中(中日)関係は、アジア、ひいては世界の平和と発展のために大変大切なことだと思っております。

二、「戦略的互恵関係」ということについて

一昨年秋季以来、それまで長い間氷漬けになっていた日中両国の政治のトップの方々の間の相互訪問も再開されました。去る五月の胡锦涛主席の日本訪問も、日中関係に再び春を招来する上で大きな成功を収めたと思います。

そのように、両国の政治のトップの方々が往来を重ねる中で、日中関係は「戦略的互恵関係」を規定されました。両国の関係が互恵の関係であるということは今更言うまでもない自明のことですが、他方、ここで言う「戦略的」ということはどういうことか。私は次のように考えます。

第一に、日中関係に取り組むに当たっては、先にお話ししたように「良好で安定した日中(中日)関係」は、日中両国のため、アジアのため、世界の為であるということをお互いしっかりと腹の中に収め、目の前に生起する折々の事象にとらわれ、これに一喜一憂することなく、長期的視点をもって臨むということなのです。

この点について、私は、とくに、両国の政治のトップの立場にある方々のこれにかけた存念、心意気が大変大切と考えます。世界に数ある大国同士の関係の中でも、特に日中(中日)関係はまだまだそこかしこに脆弱な部分を秘めていることは否定できません。ここの二、三年の間の両国政府の首脳の間活発な往来の再開はそれまでの冷え切った日中(中日)間の政

治関係を解凍する上で大きな意義がありました。これだけで日中関係に一気に青空が戻ってきたと考えるのは性急です。日中両国の一部識者たちがよく指摘するお互いの国民感情の問題、そして常にこれが、両国関係の足を引っ張るという状況はまだ解消されていません。

そういう状況の中で、日中両国で政治の要路にある方々が、お互いの間にしつかりした信頼関係を育て、このことをそれぞれのメディアを通じて国民（人民）に極力目に見える形でデモンストレートしてゆくことが必要です。そして、その方達が、とかく移ろい易い（熟しやすく冷め易い）折々の国民感情に流される。或いはこれにおもねることなく、強い意志と政治的リーダーシップを持って、大切な日中（中日）関係を上手に運用してゆくことだと思えます。

私はこの点については、福田前総理は胡錦濤主席、温家宝総理ともども大きな仕事をされたと思います。日本では、その福田さんが突然辞意を表明するということがありますが、今、私が述べたことについては麻生新総理も是非共有して欲しいと思っておりますし、そうなさっていただけると思っています。

「戦略的互惠関係」、第二点は、両国の関係を分野別に縦割りに考えるのではなく、日中関係全体を俯瞰し、総合的に考えこれに取り組んでゆくということです。

そういう中で、その時々の日中（中日）関係において一番何が必要かという優先度を見極めることも必要です。正常な状態を取り戻す中、これから両国の関係は多方面にわたって一斉に動き出すでしょう。すでにそのような兆候が見られます。そのこと自体は結構なことなのですが、他方一気にあれもこれもというわけには参りません。特にお互いに予算の支出を必要とするものについてはそうです。とすれば先に述べたように、少なくとも政府ベースの仕事については、その時々にもふさわしい強弱濃淡をつけて、両国の関係を進めるといふことが求められると思います。

このように、日中関係を総合的に、またその時々々のプライオリティをきちんと見極めながら進める、ということとは必要ということになれば、やはり両国の関係を常時モニターし、必要に応じ督励し方向を定めてゆく司令塔のようなものが、両国それぞれの側において必要ではないかと考えます。昨年十二月、北京において両国の関係閣僚を集め「日中ハイイレベル経済対話」と銘打った閣僚会議が開催されました。私は日中経済関係の分野においては、この日中閣僚会議がそのような司令塔の役割を果たしているのではないかと考えます。

三、今後の日中関係についていくつかの視点

以上のことをい話した上で、以下私は、日頃日中関係について私が考えていることを何点かお話ししてみたいと思います。

(一) 中国の「改革、開放」政策の始動は日中関係に大きな広がり深さをもたらした

本年は、中国において「改革、開放」政策が始まってから丁度三十年目に当たります。

この「改革、開放」政策が中国を如何に大きく変えたか、私は、毛沢東時代（末期）

の中国—あの時代の中国の国政のスローガンのひとつは「自力更生」ということでした—と「改革、開放」下の中国と両様の中国において北京の大使館で勤務する機会がありましたので、このことについては現地での実体験を通じて語る事ができます。中国における国策の方針が「自力更生」から「改革、開放」へと移ってゆく中、日中関係の方も急速にその深さと広がりを獲得してゆくこととなります。彼我の間における交易の活発化、日本からの投資、政府開発援助（ODA）のスタート、——私は当時、外務省中国課長の任にありましたから、このことはよく覚えていますが——日中間における人的往来の活発化、中国からの多数の留学生達の日本への受入れ、日本からも多くの学生が勉学のために中国へ……このようなことは全て中国の側における「改革、開放」政策の始動があつてこそはじめて可能となつたのです。そして、時あたかも同じ年に日中間で締結された「日中平和友好条約」がこのように弾みがついた日中関係を政治的に強く後押ししたのでした。しかし、その「改革、開放」については今日では、同時にさまざまな「影」の現象が表出してきました。よく言われるように、環境問題、貧富の格差の広がり、地方における乱開発の進行、不正、腐敗の広がり……といったことです。私はこれからの中国経済の課題は、輸出主導から内需主導へと転換をはかりつつ、環境問題等に配慮しながら良質な経済発展を目指すということだと思います。今日、中国の指導部は先に述べたさまざまな問題に日々取り組み苦闘を重ねていますが、その取り組みが成功することを国際社会は祈っています。というのも、中国における「改革、開放」という大事業の成功はひとり中国に対してだけでなく、国際社会全体に大きな利益をもたらすからです。

(二) 世界の中の日中関係

第二に、世界の平和と繁栄に貢献する日中関係という視点です。福田前総理も昨年の訪中の折、北京大学でこのことを熱をこめて語りました。

中国は、三十年にわたる改革、開放の努力を通じて、今やGDPでは世界第四位、貿易では同じく第三位、外貨準備高では世界第一位という地位を手中にしました。そして、国際政治の面では、中国は国連安保理の常任理事国として国際社会の平和と安全の問題に大きな責任を負う立場にあります。更にその中国は世界において、後ほど述べるように今や実質上、米国に次ぐ第二の軍事大国にのし上がったと言われています。

他方、日本もつとに世界における冠たる大国の地位にあります。従つてその中国と日本は、単に日中二国間関係の運営という狭い世界にとどまえず、その視野を日中関係の彼方にまで広げ、世界の平和・安定・繁栄のため相協力して、或いは、それぞれに相応しい役割を分担して仕事をしようという気になればいろいろなことができるはずで、実は、このことは、九十八年十一月の江沢民中国国家主席訪日の際発出された日中共同宣言の冒頭部分に、明確に述べられているところでもあります。すなわち、そこには次のように述べています。

「双方は、日中両国がアジア地域及び世界に影響力を有する国家として、平和を守り、発展を促していく上で重要な責任を負っていると考える。双方は日中両国が国政政治、経済、地球規模の問題の分野における協調と協力を強化し、世界の平和と発展、ひいては人類の進歩という事業のために積極的に貢献を行っていく」

しかし、その後の日中両国政府の間の関係は、周知の理由によって、この共同宣言に述べられた両国首脳の付託に応えるというには程遠い状況が長きにわたって続きました。その間、日中両国は多くの機会を逃した。私はこのことを大変いらいらした気持ちをもって眺めておりました。いまそのような冷えた日中関係は両国首脳が往來を重ねる中で、急速に本来の正常な姿を取り戻しつつあり、そのような状況の下、日中両国の間では、両国関係発展への取り組みはもとよりのこと、地球温暖化の問題、或いは、朝鮮半島の平和と安全に係る問題など両国関係を越えた地域の問題、地球規模の問題について前向きの協力関係が始まっています。私はこのことを大変うれしく思っています。

北朝鮮をめぐる情勢については、このところ、金正日総書記の健康問題がいろいろと取沙汰される中、北朝鮮政府は、国際原子力機関（IAEA）の専門家たちを北朝鮮から放逐するという大変憂慮すべき事態が起こっています。この点に関して、北朝鮮の核開発の問題が後戻りしないよう中国の役割に対する国際社会の期待は大変大きなものがあると思います。

(三) 日米首脳会議の定期化

第三点は、日米中三国の首脳の間をの会合を定例化するべしということです。日本の有力な有識者を集めたある研究会も最近同様のことを提言しています。

今更言うまでもなく、米国は世界第一の軍事大国、他方中国もその公表された額だけから見ても、今やその国防予算は世界第四番目の大きさにあり、これに公表予算値以外の推定分も含めた上で、これを購買力平価でドル換算に置き直すと、それは米国に次ぐ巨大な額になると言います（英国戦略研究所、ミリタリー・バランスによる）

中国の国防予算については、かねてより欧米のいろいろな軍事戦略研究所は、その実体は恐らく公表値の二倍から三倍であろうということを主張しております。もっとも日本の防衛予算の額も決して小さな額ではなく、今年度（二〇〇八年度）についてみれば、それは世界で第五番目の大きさです。それに、日本には多くの米軍の基地が点在しています。

このように見てくると、日米中三国の関係、お互いの間の安心感の醸成こそは、アジアの平和と安定を考える上でキイ・ファクターであるということは自明の理と言えるところだと思います。しかし、これまでこの三国の首脳の間でこの地域の平和と安定を主題とした戦略対話の場は存在しませんでした。お互いの間の不安や疑念を払拭し、それぞれの軍事戦略をめぐっての対話を深める中で、この地域の平和と安全を高めるために、それぞれがどのような役割を担うべきか、そのようなことについての話し合いの

場を構築が是非との必要と考えます。

ところで、中国の軍事戦略でわだいたったトピックがありました。それは、昨年五月の米国のキーティング太平洋軍事司令官の米国議会での証言内容です。同司令官は、北京における中国解放軍（海軍）側との協議の折、先方の幹部より「ハワイの東側の海域は米国が、西側は中国が取る（We will take Hawaii west）」ということでしょうか。その上で情報を交換することとすれば、米国はハワイ西方に海軍力を展開する負担を免れる」と漏らされたと言うのです。米側は悪い冗談として取り合わなかったようですが、このことは日本の関係者の間でもかなり話題になりました。

本年は日中平和友好条約締結三十周年に当たります。そしてその平和友好条約には、皆様もよくご存知のように次のことが謳われています。

「第二条…両条約国は、そのいずれもアジア、太平洋地域においても又は他のいずれの地域においても覇権を求めべきではなく、また、このような覇権を確立しようとする他のいかなる国又は国の集団による試みにも反対することを表明する。」

条約締結三十周年に当り、私達は今一度、こんなことを噛み締めたらいののだと思います。私はこの「反覇権」という考え方こそは、今後東アジアが共同体構想を進めるに於いても、大きなガイドラインとなると思っています。

(四) 日中青年交流の大切さ

日中の間において各界、各階層の交流が進む中、私は両国の間の青少年交流を殊の外大切なものと考えています。というのも、今後の日中（中日）関係を考える時、将来の両国関係をそれぞれの側で担うことになる若者たちが、お互いに相手の国のことについて、ゆがみのない正しい理解を持つことが大変大切だからです。そして、そのためには「百聞不一見」というように、お互いに相手のところを訪ね合い、交流を重ねることが大切です。「交流」があつてこそ「相互理解」が進み、「相互理解」あつてこそ、はじめて、日中の間ではまだまだ足りない党五の間の「信頼関係」が生まれようというものです。

日中の間では昨年、日本政府の予算で中国から毎年三千人の高校生を中心とした若者達が日本を訪れるという計画がスタートしました。また、今年からは、中国の招きで毎年千名の若者達が中国を訪ねるということになりました。中国から来た高校生達は異口同音に「中国で想像していた日本は、日本人像とは違う日本、日本人像を発見した。」と言つて帰つてゆきます。恐らく、中国を訪問する日本の青年達も同じ思いでしょう。わたしは、そのような話を聞くにつけ、あらためて、この日中（中日）青少年交流計画の大きな意義を感じています。

(五) 「歴史」の問題と台湾問題

最後に、日中関係が前向きに進む中で、時折その足を引っ張る二つの話題、すなわち“歴史”の問題と台湾問題について私の考えを述べたいと思います。

(イ) 先ず「歴史」問題について

私は、日中関係におけるあの不幸な一時期の「歴史」については、私達日本人は、こちらから逃げずに、これを直視し、そこから未来に向けての教訓を汲み取るということこそ取るべき態度だと思っています。「歴史」をこまかし、歪曲し、ひどい場合はこれに対して開き直る。そんなことをすれば、国際社会に日本を見る目線は下がるばかりです。

もともと、そのようなことをする勢力は、日本ではごく少数の人達だということも強調しておかなければなりません。

多くの良識ある日本人は、過去の一時期誤った政策の下、アジアの近隣諸国。特に、中国の人々に多大な物的損害と苦痛を強いたことについては心から反省と申し訳なかったという心情を共有しています。また、歴代の日本の総理大臣も同じようにこの「不幸な過去」について繰り返し反省と謝罪のい念を述べつつ、日本は平和国家としての途を歩むという決意を表明してきています。

更に、中国の方々は是非理解していただきたいのは次の点です。

それは、中国の方々はよく「以史為鑑」ということをおっしゃっていますが、実は、戦後の日本の歩みは、正に「以史為鑑」だったということですが、

日本は、「過去」の深い反省の上に立って平和憲法の下、専守防衛の最高方針の下、国の守りを高めることに専念してきました。戦後自衛隊の長い歴史の中で、他国と鉾を交えたことはないこと、人を殺生したことは一度もないことがこのことを物語っています。

日本は「非核三原則」（核兵器を持たない、造らない、持ち込まない）という方針を堅持しつつ、「専守防衛」ということから、遠くへ飛んでゆくような攻撃用の爆撃機、ミサイルのようなものも持つことはしていません。勿論、戦前の徴兵制も廃止しました。

そして、日本は戦後復興しを成し遂げたあとは、持てる余力をアジアを中心とした世界の平和と発展のために政府開発援助（ODA）などの形で積極的に言及されるようになったことを評価しています。

（ロ）次に台湾問題、そして日台関係についてです

台湾では去る五月、国民党馬英九総統の下、新しい政権がスタートしました。台湾における新政権の発足に伴い、中国と台湾との間でも直行便の乗り入れなど積極的な動きが始まりました。日本はこのことを歓迎しています。

新総統の就任式には、先方の招きを受け日本からは多くの政治家が台北に赴きました。注目されたのは、渡台した日本の国会議員総数二十名の約三分の一が野党民主党の人達だったということです。

これは、日本における台湾への関心が往時と違って、近年政治の世界でも党派を超えて幅広いものになってきているということを物語るものです。そしてその背景は、経済、観光といった分野での日台関係の深まりということもなることながら、

何といっても台湾における民主化の実現―従ってかつての独裁政治の下での台湾とは違う―ということがあります。

私は、かねてから私達が東アジアにおける共存共栄の世界、東アジア経済共同体といったことを語る時、台湾という大きな経済主体を排除してこれを語ることはできないと考えてきました。幸いその台湾で政権交替が行われ、大陸との関係でもより実利的な関係を深めようという、前向きな動きが見られます。两岸関係については、今後とも政治的にむずかしい障害に逢着することが予想されないわけではありませんが、そこに兩岸の知恵者が大いに知恵を発揮してお互いにウイン・ウインの世界を目指してほしいと思っています。

台湾問題についての日本の考え方は明らかです。それは、两岸関係(台湾問題)は、两岸の間の平和な話し合いによって解決してほしいということ、日本政府としては、台湾との関係はあくまで七二年の日中共同声明を遵守しながらこれを進めてゆくということです。

四. 終わりに

先の北京オリンピックは、パラリンピックも含め大きな成功を収めました。このことに祝意を表したいと思います。

中国は、今や孫うことなく世界の大国になりました。私は、オリンピック成功を踏みに、引き続き落ち着いた品格ある自信を内に秘めた大国ということを目指して欲しいと思っています。中国は大国であるが故に、そして国際社会で大きな影響力を有する国となったが故に、米国同様どの政策や立ち振る舞いについては時として国際社会から批判にさらされることがあります。日本もそのようなことを度々経験してきました。そのような時に、そのようなことを国際社会かたの批判に対しては静かに耳を傾けながら、他方それを受け入れ難い場合は感情的な言語を排して丁寧な自らの主張、政策を国際社会に向けて説明してゆくということです。日本もかつてこの点は往々にして下手でした。私がここで言う品格ある自信をもった大国とは、そのようなことも含みます。

ところで、私は、日中(中日)関係を考えるとき、よく故周恩来総理が中日関係を律するガイドラインとおっしゃっていたことを思い出します。それは「求(大)同、存(小)異」ということです。ここで言う「大同」とは、私が冒頭で述べた「良好にして安定した日中、中日関係」ということでしょう。また、中国の方たちはよく「両虎相争、必有一傷(二匹の虎が相争えば、必ずそのうちの二匹は傷つくことになる)」とおっしゃっています。また、中国では「和則兩利、鬪則俱傷」(和すれば双方にとって有利だし、戦えば共に傷つく)という言い方もあります。私達はあらためてこのことを思い出しながら、「安定した良好な日中関係」を目指し、そして「共生」「共鳴」「共創」の日中関係を目指して、お互いに引き続き共に努力したいものだと思います。

日中字形对照表

注：日本の漢字（ ）と中国の漢字（ ）で、著しく字形の違うもの、間違いや正しいものの代表例323を、50音順に比較した。

ア	縁 才	楽 掛	協 強	傑 潔	壘 壘	車 捨	場 疊	節 專	对 对	テ	馬 馬	へ	滅 滅	呂 呂
亜 愛	汚 汚	掛 挂	強 强	潔 洁	壘 サ	捨 合	疊 疊	專 专	带 带	遞 適	拜 売	幣 币	網 网	虜 虜
压 压	応 応	卷 卷	郷 乡	見 见	查 查	種 种	縄 縄	戦 战	隊 队	適 适	売 卖	頁 页	門 门	療 疗
イ	桜 桜	奸 奸	橋 桥	県 县	才 才	収 收	讓 让	箋 箋	態 态	敵 敌	買 买	辺 边	爺 爷	輛 輛
围 围	億 亿	換 换	競 竞	険 险	災 灾	臭 臭	燭 烛	銭 钱	託 托	徹 彻	発 发	変 变	爺 爷	糧 粮
為 為	力 力	敢 敢	響 响	険 宪	採 采	臭 臭	職 职	線 线	濁 浊	伝 传	髪 发	ホ	訳 译	隣 邻
異 异	華 华	敢 敢	業 业	顯 显	歳 岁	習 习	進 进	選 选	達 达	電 电	範 范	歩 步	薬 药	臨 临
偉 伟	渦 渦	歎 歎	極 极	嚴 严	際 际	衆 众	審 审	ソ	奪 夺	ト	盤 盘	補 补	ニ	ル
逸 逸	過 过	漢 漢	勤 勤	コ	搾 搾	醜 丑	親 亲	礎 础	單 单	東 东	飛 飞	舗 舗	郵 邮	涙 泪
陰 阴	箇 个	還 还	緊 紧	個 个	冊 冊	從 从	尋 寻	蘇 苏	團 团	島 岛	備 备	包 包	遊 游	壘 壘
隱 隐	画 画	願 愿	ク	壺 壺	殺 杀	洪 洪	塵 塵	莊 庄	壇 坛	頭 头	微 微	做 仿	ヨ	類 类
韻 韵	臥 卧	キ	具 具	誇 夸	雜 杂	獸 兽	ス	倉 仓	テ	動 动	筆 笔	砲 砲	与 与	レ
ウ	開 开	気 器	窪 洼	顧 顾	産 产	肅 肃	凶 凶	搜 搜	恥 耻	導 导	姫 姬	報 報	搖 摇	靈 灵
烏 烏	階 阶	龜 龟	勳 勳	吳 吴	傘 傘	術 術	帥 帥	掃 扫	遲 迟	德 德	氷 冰	豊 丰	葉 叶	嶺 岭
運 运	塊 块	棄 弃	ケ	後 后	賛 賛	準 準	醉 醉	喪 喪	着 着	ニ	標 标	撲 扑	陽 阳	麗 丽
雲 云	壞 坏	機 机	惠 惠	護 护	シ	処 処	髓 髓	層 层	貯 貯	難 难	浜 浜	マ・ミ	様 样	曆 历
工	貝 贝	義 义	經 经	効 效	師 师	書 書	趨 趨	総 总	吊 吊	認 认	フ	毎 每	養 养	歴 历
栄 栄	凱 凯	戲 戏	啓 启	岡 岡	齒 齿	将 将	セ	騷 骚	庁 庁	ネ・ノ	膚 肤	滿 满	ラ	煉 炼
詠 咏	角 角	擬 拟	慶 庆	鉞 矿	児 儿	称 称	齊 齐	象 象	長 长	寧 宁	復 复	脈 脉	賴 賴	ワ
衛 卫	隔 隔	喫 吃	鷄 鸡	構 构	時 时	勝 胜	聖 聖	藏 藏	彫 雕	熱 热	復 复	ム	覽 覽	芳 芳
煙 烟	確 确	宮 宫	芸 芸	興 兴	識 识	燒 烧	製 制	臟 脏	鳥 鸟	腦 脑	復 复	務 务	リ	蠟 蜡
塩 盐	獲 获	窮 穷	劇 剧	講 讲	質 质	傷 伤	跡 迹	孫 孙	聽 听	農 农	復 复	無 无	離 离	録 录
厭 厭	獲 获	拳 拳	擊 击	黒 黒	実 实	獎 獎	積 积	夕 夕	直 直	ハ	復 复	夢 梦	陸 陸	論 论
		魚 魚	決 決	骨 骨	写 写	償 償	撮 撮	駄 駄	沈 沈	刃 刃	奮 奮	メ・モ	隆 隆	彎 彎

先の大戦が終わりを告げてから、五十年の歳月が流れました。今、あらためて、あの戦争によつて犠牲となられた内外の多くの人々に思いを馳せるとき、万感胸に迫るものがあります。

敗戦後、日本は、あの焼け野原から、幾多の困難を乗り越えて、今日の平和と繁栄を築いてまいりました。このことは私たちの誇りであり、そのために注がれた国民の皆様一人一人の英知とたゆみない努力に、私は心から敬意の念を表わすものであります。ここに至るまで、米国をはじめ、世界の国々から寄せられた支援と協力に対し、あらためて深甚な謝意を表明いたします。また、アジア太平洋近隣諸国、米国、さらには欧州諸国との間に今日のような友好関係を築き上げるに至ったことを、心から喜びたいと思います。

平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを二度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い

世代に語り伝えていかなければなりません。とくに近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この二つを柱とした平和友好交流事業を展開しております。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後五十周年の節目にあたり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことであります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道

を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から五十周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広めていかなければなりません。同時に、わが国

は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な車輪を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹、とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします。

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/happyo>)
/danwa/danwa_7/dnu_0815.html